

リベラル・アーツ教育雑感

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2010-03-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 浜口, 稔 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/8119

リベラル・アーツ教育雑感*

浜 口 稔

グローバリゼーションとリベラル・アーツ教育

ソビエト連邦の崩壊の際、国境沿いの共和国がつぎつぎに独立し、あわててその周辺の地図を確認した覚えがある。が、そのとき所持していた地球儀は今では使い物にならない応接間のアクセサリーになってしまった。昨年9月の同時多発テロとアメリカの報復攻撃を機に、ふたたび地図や地球儀を見ることが多くなり、改めて欧米主導のグローバリゼーションに疑問を抱くようにもなった。長大な文明圏を形成しながら、これまでほとんど無視されてきたモロッコからインドネシアに至るイスラム教諸国が、今回の事件で世界の耳目を集めたのは皮肉であるが、世界と文明のありさまや現状を、民族、習俗、生活、宗教、等々、異文化圏の人々とともになまなましく実感するまたとない機会にもなったのではないだろうか。

グローバリゼーションを標語に大学の教育を考えるときに、地理学的認識をもとに世界がどう動いているかを理解することは、きわめて重要である。国連事務総長のコフィ・アナンは、地理的な情報には格別の配慮をせざるをえない立場にあり、民族や国家の紛争に絶えず神経を尖らせていなくてはならないため、世界のどこかで何かが起こるたびに「地図を見せよ」が口癖になっているようだ。「変化しつづける世界には地理学者が必要なのです」と、2001年3月ニューヨーク市で行われたアメリカ地理学会の年次大会で述べている（注1）。これからの世界理解は、今後世界の様々な政情不安を横目に、国境線の引きなおしに追われながら、地球環境の諸条件についてのリア

ルタイムの追跡を前提にするものになるのでないだろうか。

地球未来の難題と混乱は、地球の土と水と気をめぐる環境問題にかかわるものになることに異論をはさむ者はいないだろう。米航空宇宙局 (NASA) は、洪水や地滑りの予測だけでなく、航空機の安全航行のために危険地帯を明らかにするデータベースの作成や、無線通信、携帯電話用の中継塔の設置場所を決めるのにも利用できる、これまでにないほど精密な地球表面のデジタル地形図を製作しているそうだ (注2)。この地形図の一般公開をめぐることは、NASA と米国防総省の間で鏝迫り合いがあるとも聞いているが、それは地理と地形の情報が、これからの地球の行く末を抱括的にうらなう最強のツールのひとつになることが、深く認識されている証拠にはかならない。まさに地理的認識は今や、絶え間なく変転し錯綜していく気候・環境と世界情勢を一望し分析する世界 (地球) 市民を養成するリベラル・アーツ教育の課題のひとつとなるのではないか。地理学的認識の欠如が、そのまま弱小国への圧力となるような、場合によっては、その国の人々の生活苦の間接的な原因となるくらいの、それほど密に絡み合ったグローバル世界が訪れているとってよいのだから。

飛び込んできたニュースを国連事務総長のように、すぐに世界地図に定位する姿勢を教育の中で涵養すること。必要とあらば、あらゆる手蔓で知りたい情報を素早く検索する軽快さを地球市民のたしなみとして持つよう指導すること。環境問題、第三世界問題、動物の権利、児童の搾取労働、無政府状態、反資本主義、多国籍の企業、世界規模の交易、巨大な金融の変動、テクノロジーのせわしない展開に目配りしながら、グローバリゼーションやインターネットが被抑圧者を開放するきっかけとなり、それをもとにした交易体制は公正な経済活動と人権の尊重を全世界の人々に奨励すると主張する推進派の言い分が、角度を変えるとそれで不都合となる人々が出ることにも思考が及ぶような反観的な知性をつちかうこと。

先般の同時多発テロは、この十年ばかり一人勝ちの独善的マイウェイ国家

であったアメリカにグローバル世界の本来性を再考させるきっかけになったのではないだろうか。他国の地理にも歴史にも無頓着に時空間感覚ゼロのヴァーチャル・スペースをもてあそんでいるあいだに、憎悪に満ちた生身の（リアルな）イスラム教徒たちが国境を超えて無辜の民を殺害しようと侵入したわけであるから、涼しい部屋でグローバリゼーションの恩恵に浴していた者たちには、この恐怖の体験がヴァーチャルではなかったことを、どれほど深く思い知ったことだろうか。

アメリカ人は、巨大なテロを自ら体験することにより、自分たちの国がヨーロッパ、アジア、アフリカ、中南米、ポリネシア、等々の紛争地帯のひとつになりうることを思い知らされた。アメリカが文明の終着点であり、これから先の地球文明の模範になると浮かれ、アメリカニズムをグローバル・スタンダードにしようとした人々にとっては、そのことをじっくりと問い直す機会になったはずだ。報復とテロリストの殲滅を理由に他国の大地にハイテクの限りを尽くしてミサイル弾を撃ち込んだアメリカに、今後世界標準を自信たっぷりに標榜できるとは、少なくとも私は考えたくない。「究極の正義」(infinite justice) をふりかざす文明圏の規範には、正直私は不快感をおぼえる。

実際には、アメリカの人種構成のありさまが、流動化しつつある世界の縮図となっており、どこよりもグローバリゼーションの大波をまろにかぶり、その大波とは相容れないはずの国民国家の体制を切り崩していく可能性があったように思う。もとより、ほとんど理念で建国され維持されてきた、根無し草の移民によるヴァーチャル・ステイトではないか。世界貿易センターの崩壊は、全世界規模の多民族、多文化、多言語を、土地と伝統と歴史を共有しないヨーロッパ起源の理念のもとに、おびただしく抱え込んでしまったアメリカ型の社会が、畢竟するにひとつの国家的な枠組みとして存立しつづけることが困難になりはじめたことの、歴史的記念碑として語り継がれるのではないだろうか。国民国家が崩壊するという話ではない。個々のアメリカ人

がふつうの市民としての生き様を変えるわけでも勿論ない。ここでははっきり確認したいことは、人と物の流通は国家間（インターナショナル）などという悠長な代物ではなくなったという点なのだ。

考えてみれば、グローバル化していたのは恐怖（テロ）だけでなかった。実際には、すでにローカルな疫病であったエイズ、エボラ出血熱、狂牛病などをはじめとして、商品、資本、ファーストフード、麻薬、カルト宗教、汚染物質、ファッション、音楽、映画、等々の様々な物流がすでにして、地球的な規模で隈無く張り巡らされていた流通網の中をふつうに移動していただけなのである。先般の事件は、少なくとも私に、国境も文化も言語も超えて、疫病のように恐怖を媒介してしまうグローバリゼーションの正体をなまなましく実感させてくれた。

伝統の民族衣装で色分けする静態的な国際秩序を確認する式典は、もはや世界の実情をあらわしていないかもしれない。そもそも多言語・多民族の複合国家が多数を占める状況下で、あらかじめ境界線の引かれた白地図に塗り絵するような国際感覚では、グローバル化した世界の姿を認識できる時代ではなくなっている。普遍的な真理と秩序のもとに、多くの国が地球上に色分けされて収まっている図は、現実を描いたものではなくなっている。確かな唯一の価値の拠り所であったヨーロッパ流の伝統の真理追究型リベラル・アーツ観は、押し寄せるグローバリゼーションの大波の中で、その意義を問いなおされることだろう。

リベラル・アーツ教育とは？

リベラル・アーツとは、ひとまずは人間が自由な（liberal）個人として生きていくよすがとなるべき、（知的）市民としての生活の技法（arts）であると考えるところだろう。が、実際には生活・人生・世界との接点を認めながら科目履修して学ぶことは、受験勉強を終えたばかりの若者には容易なことでは

はない。では、大学のカリキュラムは、生活者としての知的市民を育成するよう組織されているだろうか。ブリタニカ百科事典の定義を見ると、「大学において、一般的な知識を授け、一般的で知的な能力を養成することを目標にするカリキュラムであり、専門的、職業的、技術的なカリキュラムに対比される」とある。が、もともとの意味を遡ってみると、周知の通り、文法、修辞法、論理学（自由三学科）、幾何学、算術、音楽、天文学の（四学科）から成っていた。今日的な語義に重ねるのは無理があるが、一見すると、世界を読み解き表現するための素養であると同時に、実用的なリテラシーと位置づけることができそうだ。これがヨーロッパ近代の産業革命期の社会的要望を受けて専門化してきた教育内容のバランスをとるように一般的な教養教育を改めて掲げるようになる。もう少し具体的には「リベラル・アーツのカリキュラムは、人文科学（文学、言語、哲学、芸術、そして歴史）、物理・生物学・数学、そして社会科学などの、主要な知識分野の総合的な研究」として位置づけられるようになったわけである。

しかしながら、今となっては、正統の知識を広く浅く満遍なくカバーしたらこうなるしかない、という以上のものは見えてこない。そんなあたりが疑問視されたのではないだろうか。リベラル・アーツ教育の必要性が問われ出したのは、ひとつには、こうした薄味の専門教育（おもに人文科学）を総花的に取り揃えるようなカリキュラム体制になっていたからだろう。ならば、このような伝統的な教養主義に立脚した体制がそのまま機能するか、まずはそれが問われなくてはならない。

リベラル・アーツは薄味の人文科学であってはならない。ところが、意識するとしないとにかかわらず、ヨーロッパ中心の教養主義を思い描きながら、とくに自然科学を、場合によっては社会科学まで、リベラル・アーツ教育の範疇からはずす人がいる。人文科学をリベラル・アーツの中心と考える独善的な発想そのものが、文学や歴史や哲学を切り売りして、とどのつまり教養は小市民のアクセサリーだと、知らぬ間に考えてしまっていることに思

いが及ばないのだ。世界と人間知性の構造を厳密に理解するために、代数や幾何学が重要であるといわれて、そのような人が心を入れ替えて計算や作図にいそむ絵は想像しにくい。双方の分野とも人知にとって必須の知識であることはまちがいない。いずれにせよ、学生にどのような知識を授けるかに気をとられて、知識をどのように批判的に摂取させるかの、専門性に縛られないリベラル・アーツならではのスタンスを忘れていたのではないだろうか。リベラルアーツ談義につきまといがちな「文化サロン風の物言い」に私は無責任な時代錯誤を感じている。

先に述べたように、様々な情勢の変化に目配りできる問題対処型の臨機応変の知性を大学で養うということであれば、古典教育だけでことがすむ道理がない。勿論、古典の研究・教育に没頭する教員を批判しようという気は毛頭ない。人間の知性は問題対処のために用いられるばかりではだめだ。真理探究型のリベラル・アーツの求道者は、むしろ大学の一員として欠かすことはできない。が、未来の選択肢がいくつもある多彩な個性の若い知性に、偏向したメニューを用意して教育の今日的な義務が果たせるかという、そうはいかないだろう。古典的な哲学や芸術などの典型的な教養科目のほかにも、テクノロジーと社会との関係を考察し、民族・文化と言語の多様性にも配慮し、欧米主導のグローバリゼーションに批判的な目を向けられる自由人を養成すべきことを、リベラル・アーツ教育のかなめに据えるべきだと考えたい。

真理追究型から問題対処型のリベラル・アーツ教育へ

インターネットや航空交通網のせいで人間は実質的な距離感覚を失い、世界を駆け巡りながら、世界の大きさを体感的に認識する契機を得られにくくなっている。全世界の空港はビジネスマンの行動パターンに準拠した機能性を軸に構築されているといわれるが、どれほど頻繁に世界をめぐるても、二

ニューヨークやパリの街中やオフィスにいるのと変わりなく、空港と同一業種の相手を近代的な交通機関で結んだルートに沿って移動するだけで、結局は異民族や異言語の体験は得られないままである。出発ロビー、スーパーマーケット、高速自動車路、特急列車、クレジット・カード、観光パンフレット、等々は、ローカリティに身を置かずに通り過ぎるための、世界共通のノッペラボウの非場所的な虚構にも等しい。グローバリゼーションがこんなふうに展開したのでは、人間の往来をスムーズにする交通機関は、かえって世界を股にかけたという錯覚を与えるばかりで、もはや国際理解をお膳立てする装置ではなくなる。

異文化・異民族をためらいなく受容できる自由な地球市民の養成を、というわけであるが、それが世界的な指導者やエリートを意味する必要はない。国民会議が掲げる「世界に通用する人材」だの世界と渡り合う知識人だのは、あからさまなエリート主義にはかならない。大学がはるか昔に大衆化し、ほとんどの学生が社会の一員として慎ましい就職を希望しているご時世に、こんな大仰な目標を誰に向かって掲げているのだろうか。世界に通用するリーダーを量産する必要はない。それよりもむしろ、世界の現状と文明と文化の行く末を想像豊かに思い描けるふつうの市民の教育が求められているのではないか。コフィ・アナンが日々直面している多言語・多民族・多文化の動向を、リアルタイムに想像できるふつうの地球市民を養成することが、これからの大学の教育のかなめとなるべきではないだろうか。

真理探求型の普遍主義の教育は、価値の多様化が進んだ今日にあっては、主要理念としての説得性をもちにくくなったのではないか、というのが最近とみに募ってきた私の感想である。価値観の錯綜する状況に寛容と忍耐をもって臨み、状況を切り抜けるためのノウハウを身につける問題対処型の教育が、これからのリベラル・アーツ教育の眼目のひとつとなるのではないだろうか。ひとつの国家や、ひとつの文化圏の中にも複数の世界観が存在することを前提に、紋切り型の善悪や敵味方の構図を胡散臭く思い、客観的事実で

あっても複数の価値観や真実から成ることを認識し、そんな物事の多面性に忍耐し、一面的な見解や偏った意図を見抜く洞察力を養成することが、大学の教養教育のかなめとなるのではないか。

そして日夜押し寄せてくる情報の多元的大波のまっただ中で、流されずに正気を保つための心得となるべきメディア・リテラシー教育にも格別の配慮をすべきである。インターネットや携帯電話など、高性能なデジタル通信網が張り巡らされた非物質的なサイバースペースでの生活が地球市民としての主要な活動形態になろうかという時代である。とおの昔に国民国家の枠を超えて文化を創出するために世界の人々が心を通わせる時代になっている。どの分野においても、なんらかの形で世界的な「知の共有」が求められていることはまちがいない。市民レベルでも、インターネットの知的空間に複数領域の横断がかるやかに展開する知的世界を立ち上げるお膳立ては着々と整いつつあるとわいていい。

科学技術とリベラル・アーツ教育

科学・技術の展開は、グローバリゼーションの物理的なインフラを整えてきたという点だけでも看過できないが、それ以外にも考慮しなくてはならないことがある。今度はそれを考えてみよう。

今日われわれが直面しつつあるのは、情報技術については勿論、材料と加工の技術、生命科学、エネルギー、環境、宇宙開発、等々、科学技術文明のすみずみまで覆い尽くすような、すべての分野にまたがる変化であるといわれる。温暖化対策に向けた二酸化炭素の固定化・回収技術、オゾン層の修復、バイオテクノロジー、気象コントロールによる砂漠の緑地化、大気、土壌、河川の水質浄化技術、気象観測や地殻変動を予測する地球観測システムやナビゲーションシステム、森林破壊と電子ペーパー、遺伝子分析から個人に特化した薬、遺伝子診断による健康予測、クローンや遺伝子操作による人類へ

の影響の顕在化，生命科学技術を操る人間の倫理観，人工知能による推論マシンの本格的な実現研究のボーダーレスな国際協力・分業体制，多言語インターネットによる英語の一元支配の打破（是非，そうなってほしいが）と，まさに百花繚乱のありさまだ。

新聞や雑誌を賑わせているキーワードをざっと無作為に挙げてみたが，勿論これだけのことを，リベラル・アーツ教育の課題として追跡しても，当然ながら限界がある。専門的な細部は高度な論証や数学的な裏づけを要するのであるから，それは科学者なり専門のジャーナリストにまかせるとして，むしろこれらの技術がヒューマニティの牙城となるべき従来型のリベラル・アーツ教育そのものの根幹をゆさぶるような展開を見せている切迫した事態に，正気の理性をもって対する道を考えるべきではないか。ようするに，重金属や毒性科学物質や排気ガスのような，公害として糾弾しやすい対象とは異なって，人倫へと忍び足で侵入してくるソフトマシーン（物質性をアピールしない先端科学全般）が，いよいよ精度を高めて人間の文化・文明を一色に染めかねない事態を考えてみる必要があるのではないだろうか。

さて，科学者は研究対象を客体化するために，構造をもつ物質組織としての人体を機械として見立てなくてはならない。だから，その方法論によって医療科学には唯物一元論が避けがたくつきまとう。従って，関連諸科学が総動員されて，医療科学の実績を着々と積み上げ，人間はDNAで予測制御できるマシーンだということに徐々に馴致されていくことが，まずは懸念されるのだ。「機械に思考が可能か」と問われて，「僕は機械なんだけど考えることはできるよ」と言い放ったMITの人工知能学者マーヴィン・ミンスキーの主張に，超微細コンピュータとナノテクノロジーの時代の「機械」概念の変容を見てとることは容易である。こうした機械概念の変容に気づかずに，いのちの神秘や尊厳を連呼して科学の暴走にブレーキがかかると考える者は，事態の本質を少しも理解していない。そんな表現はテクノロジーの推進者までもが，躊躇なく連呼していることだ。

すでにして人間存在は、頭のとっぺんから爪の先まで、機械を扱うのと同じ手つきで修理される、医療科学にとってはすでにして機械そのものなのである。今では「生命」物質である「肉体」を加工し「精神」をつかさどる「脳」まで修復の対象になっている。機械が脳にとってかわり、ES細胞をもとにしたバイオの技術が脳細胞を再生し、あげく人体を複製するクローン人間が生み出されつつある。分子や原子のレベルで物質を変換してしまう、ナノテクノロジーによるバクテリアサイズのロボットと抱き合わせて技術が詰められていったら、人体は化学物質と弱電過程で制御される微小機械の複合体と見立てられ、われわれが築き上げてきた人倫の後ろ盾としての世界観や死生観は着々と解体されていくかもしれない。予測できない心身の汚染がはじまるとともに、われわれが死生観や倫理観や社会秩序の拠り所にしてきた世界イメージが、空虚なヴァーチャル・イメージへと変貌しかねないのだ。

近代科学はもともと医療の実践とのかかわりで生まれたものでもあるから、人体の一部を切除したり繋いだりまでにはいいとして、臓器や器官や細胞の再生や加工や量産などと話を聞くと、われわれの生身の現実感覚にじかに触れてきて、社会に不穏な空気を惹起しそうである。が、事態の深刻さに見合うだけの議論がメディアや大学教育でおこなわれているかという、そうはなっていないのではないか。問題は途轍もなく大きいのに、人倫破壊を懸念する伝統の哲学の力は脆弱である。これまで涼しげに旧弊の倫理観で切っ捨ててきた人間機械論が、われわれの中途半端な理解では容易には認識できないくらいデリケートなものになったことも、原因としてあるかもしれない。そのうえに、われわれの危機意識を、目に見えない、腹の足しにならない無闇な懸念だと、同じ論調で「尊い命を救うため」という安売りの人道主義を臓器移植や再生医療を推進する口実にして斬り返してきたら、どうなるか。これからのリベラル・アーツの手ごわい相手となるだろう。

バイオの世紀のリベラル・アーツ教育

そんなわけで、バイオの世紀と予告されている21世紀の科学は、科学の最終ターゲットである人間をめぐる相当に混乱したものになるだろう。ゲノム（全遺伝情報）の解読や人間の複製も不可能ではない派手やかなクローン技術の登場で、既存の生命観は軒並み色あせ、社会は新しい生命倫理を求めて揺れている。が、どう生命観が揺れるのかを十分に理解できぬまま、技術そのものは止むことなく進展していく。社会の倫理を支える世界観・死生観を書き換える必要があるほどの変革が進んでいるというのに、マスメディアもマスコミも踏み込んだ問題提起をしているとはいえない。

つい最近まで、科学や技術がいくら突拍子もない暴走をしても、天地のみわざを超えることはできないとか、生命操作の神様ごっこをすると手痛いしっぺ返しをくらうだろうと、たかをくくって静観していられた。人間には常に大自然の摂理という絶対者が立ちほだかり、多くの場合、夥しい犠牲者を出してしまうが、生命の操作と支配にブレーキをかけてくれると考えていたからである。たとえば、誕生や死、親から子へと形質を伝える神聖な遺伝は、人知の遠く及ばない大安心の聖域として守護されていると考え、科学の暴走を遠目に、どこかゆとりを残して科学の前進に旗を振りつつけたり待ったをかけたりすることができた。ところが、社会における遺伝的關係性の網の目の結末点としての「私」の定位に、クローン技術は深甚な混乱をもたらす可能性があるのだ。たとえば、自分のクローンとして誕生した子どもは遺伝的には双子の兄弟なのに、年齢は親子ほどにも、場合によっては祖父母と孫ほどにも離れるケースが生じる事態が予想される。そうになると、生まれた子どもと妻や兄弟との関係はどうなるか。遺産相続や法律的な問題もからんだ親族的秩序が崩壊したら、それをもとに受け継がれてきた社会規範はまっとうに維持できるのだろうか。そのときの混乱を想像するだけでも気が遠く

なる。

それだけではない。子宮が萎縮している60歳過ぎの女性でも、自分の卵で妊娠・出産できる可能性が出てきた。自分一人でも、男同士でも、女同士でも、自分の子どもを産むことができるようになる。弟の精子と提供卵子を体外受精させ自らの子宮に移植したあと男児を出産、さらに、卵子提供者もその弟の精子で女の子を出産し、本人たちは近親姦姦ではないから道徳にも抵触しないと言いはった例もすでにある。さらには、生まれてくる子を前もって好みのままにデザインしたり、閉経した女性を出産させたり、チンパンジーによる代理出産にも踏み込もうとする。さらには、不治の病が発覚した後、若いときに採卵し、快癒後高齢時に出産することも可能になりそう。ゲノム情報をもとにした進学や就職、保険契約時の差別。まちがった遺伝決定論の蔓延。優性思想の復活。人体の操作による長命、臓器や細胞の部品化、ナノテクノロジーを駆使した人間のサイボーグ化。

遺伝情報の扱いにしろ、クローン技術にしろ、これまでまったく経験のない新しい分野や事象に対する社会の備えについて議論すること自体がかなりむずかしい。ただ、人間存在の本質、人間らしさの原点を、ゲノム解析で読み解けるとまで言い切る太平楽な科学者に容易に説得されてしまう批判精神の欠如は、リベラル・アーツ教育で補うべき最重要の課題のひとつになるだろう。人間の尊厳というきわめて漠然とした価値基準を想起させながら、それを人類の福祉というオブラートに包んで、功利性への後ろめたさと生命操作へのおののきを振り切って、好奇心と知識欲に駆られて技術を追求していく科学者たちの暴走を冷静な批判的精神でもって監視する市民を教育する場は、大学以外のどこにもうけられないだろう。

生命科学研究の大半は、原子力開発のような大型の施設や特別の材料はいらないらしい。いつそこでだれがどんな研究をしているかを常時監視しつづけることはむずかしいのだが、何よりも研究そのものが新たなモラル上の問題を時々刻々創造する時代になったことを、研究者自身が自覚すべきなの

だ。われわれの眼前に浮上した問題群の多くが、科学の方法論や認識を洗練し工学的に実現させた結果であることに、純粋な知的好奇心をふりかざして無頓着を装うのは、知識人としての期躰である。良識とモラルは教えるものではない、としたり顔でうそぶく人間がいるが、それはまちがっている。自らが携わる物質科学の研究の社会的な行く末をなぞる想像力を培うには、社会や人間心理や人倫を柔軟に連想できるリベラル・アーツの自由な批判精神にもとづいた教育が、科学教育とは独立に組織化される必要があるだろう。

私は理工学部に所属しているが、そこでの教育活動の一環として、テクノロジーの最近の進展がもたらす社会的な影響や生命観への波及を、若い学生たちとともに考えようと、1・2年対象のゼミナールを開講したことがある。バイオテクノロジーやナノテクノロジーを主軸にした医療科学を中心に、人間は機械か生命か、などという時代遅れの二項対立が無意味になるほど洗練された医療科学の現実を、学生たちと確認しあった。が、私も含め、学生たちも、驚異の先端技術がもたらした現実はどう対応したらいいのか、とまどうばかりだったのである。

たとえ著名な哲学者や宗教家が雄弁に生命の神秘や尊厳を説き、テクノロジーの非人間性を言い募っても、学生たちは、DNA 制御で人体の器官をデリケートに再生・創造できる医療と、われわれの生命観や世界観の根本的な変革を迫る圧倒的な現実に対して、不安を感じると表明しつつも、それを上まわるほど感嘆し畏怖すら覚えると率直に告白する。一方で、反対を唱える大方の識者らの、こうした大きな認識の変容を十分に省みない、科学者や企業の非道徳性や功利主義を告発するだけの安易さには、不信感をあらわにする。生命科学のもたらす新規な局面を、旧弊の無骨な機械イメージですくい取って糾弾する手つきは、ナイーブな若者たちにとって的を外れに映るわけで、十年一日の人道主義的批判がうまく機能しないことをあっさり見破っているわけだ。なかなかどうして、あなどれない。

が、そんな学生たちにしても、嫌悪感と期待感をないまぜに、さいごには

親や社会から受け継いだ因襲的な倫理でかたづけオシマイにすることが多い。人類の未来や市民としての社会的責任など、話が重くなると、考えつづける忍耐を失い、元気のよかった学生も日和見するようになる。人体が交換可能なパーツから成る機械や工場に見立てられるようになると、暴力に歯止めがかからなくなり、表現に苦慮しながら、殺人に躊躇する人倫の基盤を維持できなくなるだろうと言ってくる者もいるから、ややこしい問題が未来に待ち構えていることは、はっきりと認識しているようだ。が、その問題の複雑さと深刻さだけでも、もっと多くの人々が知らせるべきだとは考えても、一市民としていかにふるまい、批判のレトリックをどう組み立てたらいいか、途方に暮れてしまうのである。が、まずはそれでよかったのだ。

ディスカッションのお膳立てをし、やさしく発言を促しても、大方の学生は私からズバリ解答を求めるような質問をする傾向にある。教室は答えが得られる学習塾などではなく、問題の所在や多面性を確認し、取り組みの複雑さをそのまま抱えていく忍耐をつちかう場であることを納得させることも必要なのだ。答えがなくても考える問題が教室において成立することに戸惑いを見せる学生たちも、やがて同席している人の数だけ答えがあることを面白がるようになる。学生たちの心の中に、親や社会から受け継いだモラルとの葛藤を演出してやるだけでも、リベラルアーツ教育ならではの役割を果たすことができるのでないだろうか。

情報リテラシーとリベラル・アーツ教育

大学は企業の研究所や民間のシンクタンクの先進性や情報収集力を侮れなくなった。さらにインターネットの時代となり、知識・情報の収蔵センターとしての優位性を誇れなくなった。情報や知識はとおの昔に大学の専有物ではなくなっている。インターネットが普及したおかげで、それまで情報面で不利益をこうむっていた人や国でも、学術・技術をはじめとする、ありとあ

らゆる情報を、低価格で、あるいは無料で瞬時にして入手できるようになった。それにより、図書館や大学が少ない国や不便な僻地に住んでいる人々と(但し、何らかの通信インフラと端末すら得られない最貧国の人々は対象外となる)、潤沢に図書を購入できる国との利用可能な情報量の格差は、かなり埋まりつつあるとあってよい。

IT バブルの失速と、それにとまなう知の IT 革命の終幕を唱える者がいるが、それは実情を見据えそこなった性急な物言いである。実際には世界経済の牽引車としての一時的な失速にすぎないのであって、ヴァーチャル・スペースに收藏され目まぐるしく流通している知識と、それを効率よく利用するための先端機器とノウハウの発達は、まだまだ成熟には遠いかもしれないが、失速したこともなければ、バブルのようにはじけたこともない。大きなブレイクスルーがないだけで失速をいうのは、文明の発達を目先の展開で判断する近視眼的な不見識である。むしろ今は様々なハードやソフトを普及させ飽和状態とすることで、地球を覆う知識世界の見通しを再評価するための模索段階と捉えるべきだろう。

少なくとも学術情報の検索環境に関しては、すでにしてそのメリットは計り知れない。膨大な情報が自宅に居ながらにして入手できる状況は決して軽々しく考えることではない。百科全書などの書籍で調べがつかなかった知識がヴァーチャル・スペースのどこかで探り当てられるというだけでも、刮目すべき事態なのである。ただの箱と画面とキーボードにすぎないコンピューターが、居間や台所でもこれだけの作業をこなすようになったわけだ。勿論、インターネットは情報の宝庫といわれる反面、巨大なくず山であることも事実である。ここで問われるのは、玉石混淆の情報がばらまかれている空間から、蓋然性の高い有益な情報だけを、自らの調査目的に合わせて選り抜く力である。国内利用者だけでも数千万人となったインターネットの、信頼性の低いクズだらけの情報の大海を回遊して必要な項目を探し出し、知性を創造性へと導く情報収集のノウハウを、なんらかのかたちで大学でも教える

べきではないだろうか。

コンピュータ・リテラシーとは、広い意味での「読み書き算」のことだが、ITテクノロジーとグローバル化の急速な普及を受けて、とりわけ、プレゼンテーションかと英語のリテラシーがらみで、なかばヒステリックに叫ばれるようになった。大学の教育も就職もそれに翻弄されているような印象がある。目の前の就職難や企業からの世知辛い注文に戸惑って、WORDやEXCELを習得し、TOEICのスコアを上げる教育をほどこさない(TOEICが検定する英語力の実態が何であるか確かめぬまま盲信して)、大学の責任を果たせないかのような、身も蓋もない論調も教職員の双方から聞こえてくるようになった。が、これは問題の本質と現状を捉え損ねた勘違いである。本当の問題はネット社会に向かって突き進んで世界を読み解くためのツールとしての情報リテラシー、さらにはメディア・リテラシーを、いかにして教育のなかに取り込むということなのだ。

これから大規模な同時遍在(ubiquitous)のIT・ネットワークのまったただなかで、いつでも、どこでも、誰とでも交信し、情報を検索し利用できるような超小型コンピュータを時計や眼鏡などに組み込んだ本格的なウェアラブル・コンピューティングの時代がやってくる。われわれは現実と虚構の双方向に情報が飛び交うリアル・ヴァーチャルな空間に生息することになるが、そんななかでの知のあり方にも、当然ながら取り組むべき課題が創出されることだろう。

情報リテラシーは人間としての生存行動の基本とでもいうべきものだ。情報をもとに行動を選択するのは、生き物の基本的な生存手段なのであり、適応行動そのものが、基本的に環境から情報を収集し、環境内の自らの位置に好都合な選択・編集・要約をし、改めて生存の根拠を固めたり、さらなる生存の根拠である同胞や社会へと発信もしくは返信する過程を意味するといってよい。メディア中心の環境に取り巻かれている今日、人間にとっては環境そのものが大規模に加工を施された「虚構中の虚構」となるので、そんな中

で生存するためには、それなりの訓練が必要になるのは火を見るよりも明らかである。

メディアについてまわる事態ではあるが、世界貿易センターのテロはイスラエルの陰謀だとするまことしやかな情報が電子メールを通じて中近東に大量に出まわったことがある。このガセネタは、ロシア、シカゴ、パキスタン、アフガニスタン、エジプト、等々へと、世界中のメディアで紹介され、諸国・諸言語を伝播し、記事の信憑性を著しく低下させていきながら、なおもそれらしい情報として地球上を飛び交った（注3）。インターネットの誤報はインターネットで回避できると、楽観的なことをいっている向きもあるが、動揺しているとき、身を乗り出してまで信じたい情報、論証の限りを尽くされても信じたくない情報、いずれも多かれ少なかれ歪んでしまった情報に、情緒的な人心が誘導されていくのを避けるのは、これからますます困難になるだろう。

そんなあやうい特徴が、インターネットの一面としてある。これからの知識世界がこれを主流に展開することに不安をおぼえるが、だからといってインターネットの情報を無価値だと即断することも避けなくてはならないだろう。場合によっては、そんな偽の情報で巨大な力が動く事態も想定しなくてはならないのだから。そもそも情報を真と偽にわけること自体に無理があるのだ。それよりも、真偽や○×や穴埋めによる解答に馴致されている若い知性に、事象の多義性への理解と忍耐を教え、真偽を判断できない情報の恣意性と虚構性を冷静に多角的に分析する「問題対処型」のリベラル・アーツ教育をほどこすべきではないだろうか。それはインターネットだけの問題ではない。

南イリノイ大学名誉教授で、レバノン系のジャック・シャヒーン氏は、アラブ人が登場する無声時代からのハリウッド映画909本を調べ、偏見なく描かれている作品がどれだけあるかを検証し、結果わずか12本しかなかったことを発見した。総じて邪悪なアラブ人のイメージがハリウッドの巨大メデ

ィアを介して連綿と世界に喧伝されきたたようなもので、「一種の暴力装置ではないかとさえ思える」と慨嘆している(注4)。これも、事象には多面性があることを知らないと、公正なものを見方ができなくされるメディアの危うい一面だ。表立った情報からは得られない物事の多義性を知らないまま漫然と映像を眺めていると、大量にばらまかれたステロタイプを事実だと錯認しがちだ。偏見や固定観念はどのみちついてまわるものだが、民族や人種にかかわると、それは容易には訂正できない社会通念となって、日常的には無意識の、有事の際には意識的な圧迫や制裁の口実となることが多い。それは同時多発テロ後のアメリカ社会の対応ぶりをみればよくわかる。が、教室で教材として用意したメディア情報に対しても、学生は注意してやらないと、多くが驚くばかりの無防備ぶりを露呈する。

今年度私は、前期・後期と、「琉球の博物誌」を表題にした教養ゼミナールをうけもった。が、そのとき授業用に用意した映像資料を生の実事と思ひこむナイーブな学生には何度もどかしい思いをした。沖縄の島の集落や家屋や人々や海山の自然をひとまとめに認識してもらおうと、コメディ仕立ての映画を見せたのだが、わざわざ時代を遡った設定のフィクションだところわっているにもかかわらず、劇中の夜這いのシーンに、そんな習慣が今でもあるのかと不快感を示したり、小さな離島の様子をそのまま沖縄全体の風景と決めつけて総括的なコメントをしたりする学生が必ず出てくるのである。啓蒙のつもりが別の偏見を呼び込んでしまいそうで、なんともじれったい。

勿論これはこの授業に限らないことで、他の授業でも啓蒙のつもりがかえってとんでもない思い込みを助長して頭をかかえることがある。その制作過程を遡及してふつうに想像すれば、いかなる映像資料も、テレビ局や製作者の意図で編集され加工されたある種の「作り事」であることに思い至るはずなのに、これがドキュメンタリーだったりすると、ほとんど鵜呑み丸飲み状態である。大学で用意される印刷メディアを信頼(盲信?)するその延長線で映像資料を教室で使うと、批判を差し挟むことなく受容してしまうという

ことなのかもしれないが、だからといって権威に弱いというのでもなさそうだ。

「いまどきの学生は」というつもりはまったくない。「りっぱな大人」の映像メディアの受容もおおかたそんなところだろう。が、いずれにしても学生たちは、メディアに誘導されながら、どこかメディアに対してたかをくくっているのではないだろうか。それが本格的な知の道具になりうることに思いが及ばないようでもある。『メディア・リテラシー』の著者、菅谷明子氏は「メディア・リテラシーとは機器の操作能力に限らず、メディアの特性や社会的な意味を理解し、メディアが送り出す情報を「構成されたもの」として建設的に批判するとともに、自らの考えなどをメディアを使って表現し、社会に向けて効果的にコミュニケーションをはかることでメディア社会と積極的に付き合うための総合的な能力を指す」（注5）と書いているが、私としてはこれを、メディアが媒介するグローバリゼーションとインターネットとテクノロジーの時代を生き抜いていく知恵を涵養するリベラル・アーツ教育の基本戦略のひとつになるべきだと考えている。

注

* 本稿は人文科学研究所総合研究「リベラル・アーツ改造による戦略的カリキュラムの構築」（1999～2001年度、研究分担者：越智道雄、土屋恵一郎、寺島善一、浜口稔）の浜口分担分の中間報告の意味をこめた雑感である。参考にした情報は本文では入り組んだ用いられ方をしており、書籍・新聞・雑誌の記事、インターネット情報、等々、多岐にわたり錯綜を極め、特別に依拠した文献はない。全般的な参照書目や情報源の呈示の仕方には工夫と時間が必要であると思われるので、これは最終報告までの宿題としたい。

- 1) Jennifer Mapes, "Changing World Needs Geographers," *National Geographic News* (March 8, 2001) を参照。
- 2) Mark K. Anderson, "Military Wary of Map's Release," *WIRED NEWS* (Dec. 12, 2001, <http://www.wired.com/news/technology/0.1282.49033.00.html>) を参照。
- 3) ブライアン・カーライル「テロ事件に関する危険なデマ：ウェブで広まった「イ

スラエル黒幕説」(msn, Slate, 2001年10月9日)にその顛末が報告されている。

- 4) 朝日新聞2002年1月1日版の第一面を参照。
- 5) 菅谷明子『メディア・リテラシー』(岩波新書, 2000年)にメディア・リテラシーの基本的な考え方と諸外国の取り組みが紹介されている。

(はまぐち・みのもる 理工学部教授)